

《 7,8合併号からこのテーマで連載しています。》

成犬の年齢から老犬の年齢にさしかかり、何かと物に躓いたり、ぶつかったりすることが多くなった。しかし、それ以上の症状もなく、外見は今まで通り元気なおじいさん犬であった。そしてある日、幼稚園で徹夜の仕事があった。妻と息子も泊りがけで手伝いに来ていた。そして朝の7時過ぎ、自宅の娘から涙の電話が。「犬が死んじゃったあ」と。妻が電話にでていたのだが、私にも娘の泣き声が受話器から聞こえるほどの号泣だった。すぐに妻は帰宅し、仕事を終えた私と息子が自宅に戻ったのは昼前頃だった。たまたま滞在していた私の両親にも手伝われ、ダンボールの箱の中に横たえていた。たくさんの花と一緒に、既に硬直し始めているのに、その表情はとても温和で、私に「大将！よう頑張りましたやろ。褒めたってください。でももうあきませんわ」と語りかけているようだった。遺骸を処理し、家の中の愛犬グッズも処分して、もう再び犬を飼うことはないだろうと、心底思った。しかし、犬のいない生活の体験をほとんどしていない息子が、じわじわと我慢できないようになってきた。「僕も世話するから、新しい犬を探そうよ」とそれまで頑なに犬を飼わないと言っていたのに、急に考えが変わってきたらしい。やはり犬は家族の一員なのだ。犬のいない暮らしは我が家にはありえない生活だと思った。そうになったら動きは敏速になる。妻の希望「バーニーズマウンテンドッグ(\*1)のメス」をインターネットで探し始めた。まずは見つからないだろうと思っていたのだが、たった一頭だけ売りに出されているのを見つけた。ブリーダーに足を運んだ。6頭の幼犬のなかで特に体が小さく、ぼんやりとした表情の犬が、残っていた犬だった。すぐにそれを分けてもらうように頼んだ。健康診断やチップ(\*2)の埋め込みなどで引き取れるのは約2週間後だった。新しい首輪や引き紐を用意し、食器も新しく買って、犬の到着を準備し、家族全員で犬を引き取りに行った。道中、まだ名前が決まっていないことに気づき、息子の提案で「ミルクィー」と名付けられた。黒が主体の色の犬なのに、なぜミルクィーだったのか、今では思い出せない。ブリーダーに着き、一人ずつ犬を抱き上げ、頬ずりをし、抱きしめてやった。犬はまだ不安で仕方がない様子で、私たちの腕の中で震えていた。帰りの車の中でも不安そうな表情は変わらなかった。そして家に着き、水を飲ませると少し落ち着き、その後は好奇心一杯で家の中をウロウロしはじめた。前の犬には禁止していたリビングへの侵入も、注意されてもお構いなしに入り込み、部屋の隅々のおいさを確かめていた。

注1 およそ2000年以上前から、アルプスの厳しい気候の中で、牧畜犬、護衛犬としてだけでなく、ミルクや乳製品、農産物などの輸送・運搬の際に荷車を引くなどの仕事をしていた古い犬種。名前は原産地ベルン市にちなんでつけられたもので、山岳地での活動に耐えられる犬という意味。

注2 ヨーロッパ各地で義務付けられている犬の管理のためのチップ。通常耳たぶに埋め込まれる。その中に犬種や飼い主などの情報が全て入っている

《つづく》